

天地有情

文學士土井晚翠著



文學士土井晚翠著

天地有情

東京博文館藏版

明治三十二年四月四日印刷

明治三十二年四月七日發行

定價金廿五錢一

版權
所有

著者 土井 林 吉

發行者 大橋 新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 島 連 太郎

東京神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三 社 光

東京神田區美土代町二丁目一番地

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

序

序

(一)

「或は人を天上に揚げ或は天を此土に下す」と詩の理想は即是也。詩は閑人の嚙語に非ず、詩は彫虫篆刻の末技に非ず。既往數百年間國詩の經歷に關しては余將た何をか曰はん。思ふに所謂新軀詩の世に出でゝより僅に十餘年、今日其穉態笑ふべきは自然の數なり。然れども歲月遷り文運進まば其不完之を將來に必ずべからず。詩は國民の精髓なり、大國民にして大詩篇なきもの未だ之あらず。本邦の前途

をして多望ならしめば、本邦詩界の前途亦多望ならずんばあらず。本書收むる所余が新舊の作四十餘篇素より一として詩の名稱を享受するに足るものあらず。只一片の微衷、國詩の發達に關して纖芥の貢資たるを得ば幸のみ。著者不敏と雖とも自ら僭して詩人と爲すの愚を學ぶものに非ず。

東京に於て

明治三十二年三月

土井 林 吉

例言

例

言

(一)

一本書に収めたる諸篇の大多數は嘗て「帝國文學」及び「反省雜誌」に掲載せるもの、今帝國文學會及び反省雜誌社の許諾に因りて茲に轉載するを得たり、謹んで兩社に謝す。

一、詩を以て遊戲と爲し閑文字と爲し彫虫篆刻の末技と爲すは古來の漸なり、是弊敗れずんば眞詩決して起らじ。一般讀者の詩に對する根本思想を刷新するは今日國詩發達の要素なるを信ず。附録は泰西諸大家の詩論若くは詩人論なり。素是諸書漫讀の際偶然抄譯し置けるもの、故に

精を窮め理を竭せるには非ずと雖も今日の讀
詩界に小補なくんばあらず。敢て切に江湖の精
讀を請ふ。

天地有情目次

希望	一
雲の歌	三
星と花	九
鷺	一〇
萬有と詩人	三
哀歌	六
海棠	三
無題	三
詩人	三
夕の思	三
岸邊の櫻	四

花一枝	五一
夢	五三
夏の夜	五六
光	五六
月と戀	七二
夕の星	七三
墓上の花	七四
暗と眠	七六
廣瀬川	七八
籠鳥感	八〇
馬前の夢	八二

花と星……………	九
浮世の戀……………	一〇一
登高……………	一〇五
夜……………	一〇七
小兒……………	一〇八
赤壁圖に題す……………	一一一
夏の河……………	一二三
青葉城……………	一二四
別の袖に……………	一二五
人の世……………	一二六
紅葉青山水急流……………	一二七
枯柳……………	一二六

造化妙工……………	一二七
靜夜吟……………	一三五
哀樂……………	一三七
星落秋風五丈原……………	一三八
夕の磯……………	一六九
暮鐘……………	一七〇
附 錄	
カゝライル……………	一八三
セレイ……………	一八九
シヨージ、サン……………	一九三
エマルソフ……………	一九三
ユイゴ……………	一九九

天地有情

土井晚翠著

希

希望

望

(一)

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆるとき、
夕月波にしづむとき、
黒^{くら}暗^{やみ}よもを襲ふとき、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて

むくろの土に返るとき、
 心のなやみ終るとき、
 罪のほだしの解くるとき、
 墓のあたに我魂^{たま}を
 導びく神の御^み聲あり。
 嘆き、わづらひ、くるしみの
 海にいのちの舟うけて
 夢にも泣くか塵の子よ、
 浮世の波の仇騒き
 雨風いかにあらぶとも
 忍べ、どこよの花にほふ――
 港入江の春告げて、

雲の歌

流るゝ川に言葉あり、
 燃ゆる燐に思想あり、
 空行く雲に啓示あり、
 夜半の嵐に諫誠あり、
 人の心に希望あり。

ゆふべは崑崙の谷の底
 けさは芙蓉の峯の上
 萬里の鵬の行末も
 馳けり窮めむ路遠み
 無限のあらしわが翼
 空の大うみわが旅路。

空の大海星のさと
緑をこらすたいなかに
懸かる微塵の影ひとつ
見るく湧きて幾千里
あらしを孕み風を帯び
光を掩ふてかけり行く。

いかづち怒り風狂ひ
山河もよどみ震ふとき
天濤高く傾けて
下界に注ぐ雨の脚
やめば名残の空遠く
泛ぶ七いろ虹のはし。

曙^{あけぼの}の紫こむらさき
澄みてきらめく明星の
光微かに眠るとき
覺むる朝日を待ちわびつ
やがて焔^ほの羽添へて
中より高くのぼし行く。

しづけき夜半の大空に
ほのめき出づる月の姫
下界の花を慕ひつゝ
半ば耻らふ面影は
ために掩ほはむわが情
輕羅の袖と身を替て。

照りて萬朶の花霞
 花にも勝る身の粧
 あるは歸鳥の影呑みて
 ゆふべ奇峯の夏の空
 海原遙か泛びては
 紛ふ白帆の影寒く。

織ればわが文春の波
 染むれば巧み秋の野邊
 羽蓋凝りて玉帝の
 御駕くろま空に駐るべく
 錦旗かへりて天上の
 御遊ぎゆうの列の動くべく。

跡こそ替れ替りなき
自然の工みわが匂ひ
嶺に霰く夕暮は
天女羅綾の舞でろも
断片風に流れては
われ晴空の孤月輪。

影縹緲の空遠く
ゆふべいざよふわが姿
無心のあどは有情の
誰が高樓かうろうの眺めうや
珠簾かすかに洩れいでゝ
咽ぶ妻琴ねも細く。

千仞高ききり崖きしの
 嶺に聳たつ松一本
 緑の枝に寄りかゝり
 風の袂を振ふとき
 鳴く音おとすみて來るたづに
 貸さむ今宵の夢の宿。

岸の柳ともろともに
 水面に影を宿すとき
 江山遠き一竿かんの
 不文のひじり何と見む
 思は清く身は輕く
 自在はわれに似たる身の。